

名古屋 文化 情報

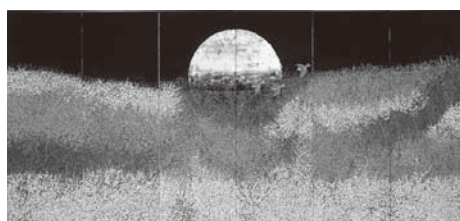
2012
2
Feb.

No. 335
NAGOYA
Cultural
Information



Contents

二月のうた・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
2011年をふりかえって・・・・・・・・・・・・ 3
この人と… 岩田 西園さん（上）聞き手／飯塚恵理人・・・・ 6
2011年をふりかえって・・・・・・・・・・・・ 8
おしらせ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10



表紙

作品

「路一彩時期」

(1985年/6曲1隻〈210cm×450cm〉一屏風/岩絵の具)

厳しい冬を越え、春を告げる梅の花が咲きはじめる。
もうすぐ寒さやわらく穏やかな季節がやってくる。

平松 礼二 (ひらまつ れいじ)

1941年 東京都生まれ、名古屋育ち

1979年 第1回 中日大賞展、大賞受賞

1989年 第10回 山種美術館賞展、大賞受賞

2004年 第57回 中日文化賞 受賞

元・多摩美術大学教授

二月のうた

長い雨の慰め

はやしのりこ
早矢仕典子

雨のみちを歩く
長らく 素どおりしていた道を
ていねいに なぞるようにして歩いていく

雨に包まれる

やさしいはずの雨に包まれる
長い雨の慰めのような音に包まれる

こんな日は だれも歩かない
軒の下に 歩かないようにしている 傘はどこかの
軒の下に すぐに畳まれたままにしてあるだろう

いつも 通りかかると必ず雨脚がはげしくなる
一本の道がある
(また ここへきたのだ――)

避けることはできないので
避けることは たぶん意味がないので
そのままいくと

またいつもの曲がり角にさしかかり
そのころには もう雨の道のことなど
わすれてしまう

どこかで 沈丁花の匂いがしていたことも
「三十年前」(それとも「三十年後」?)
ということばが口をついたことも

たどり着いたころには
暗い地面のそこから
足許へ

慈愛 のように染み透ってくるものがある

去年の今頃、まだ私たちは何も知らないでいました。ある雑文の中で、「黒い波」という言葉を比喩に使ったことがありました。ひたひたと、得体の知れない不穏な黒い波が迫っているイメージでした。ひと月ほど先の沖まで、現実がそれが迫ってきていることも知らないで。

(日本詩人クラブ)

2011 1年をふりかえって

洋舞 長谷 義隆 (中日新聞放送芸能部編集委員)

東日本大震災という未曾有の事態が起きた。舞踊作家、舞踊手は舞踊の立場で何ができるのか。大きく問われた年だった。名古屋はもとより日本のバレエ、ダンスが、社会の中でどういう位置づけにあるか、どんな役割を果たせるのか、注目してきた。しかし、一部の有志がチャリティー公演に出演、開催したり、被災者を公演招待したりという善意の活動はあったが、その動きはあまりにか細い。打ちしおれて手をこまねているのか。歯がゆいばかりであった。

もちろん、震災を作品テーマに織り込む動きは一部にあったが、管見では時局的な反応を超えたインパクトを持つステージには出合えないまま。来年以降に期待したいところである。

さて、「3・11」以前に創作された作品だが、大震災、原発事故を経て、何か違う強い意味をもって立ち現れてきた。そういう作品として、石井潤が松岡伶子バレエ団に振り付けた創作バレエ「カルミナ・ブラーナ」(7月29日)に目を見張った。運命の女神フォルトゥナ(伊藤優花)が、千年に一度の大災害に襲われたこの時代の降臨したように舞台上に登場。メビウスの輪のように舞台は円環し、終曲で運命の女神に再びひれ伏す人間たち。運命の非情と、はかなくもいとおいしい人の営み。無常観が通奏低音のように響いた。

震災を離れた創作では、川口節子が主宰する自身のバレエ団に振り付けた「初恋」(11月12・13日)が光った。ニジンスキーのバレエ「牧神の午後」を大胆に換骨奪胎し、文豪ツルゲーネフの小説「初恋」の世界に置き換えるという離れ業をやったのけた。後藤千花ステップ・ワークスバレエが初演したバレエ「美女ヶ原」(10月22日)は、日本的な诗情と幽玄味に満ちた佳作だった。台本・演出の伊豫田静弘と振付家中島伸欣が手を組み、泉鏡花の伝奇小説を原作に、妖花咲き乱れる魔の山を舞台に、現在と過去、人間界と魔界、生者と死者の霊が交錯する。古典バレエ「ジゼル」にも、世阿弥の夢幻能にも相通じる悲劇性と幽玄味があった。

チャイコフスキー記念豊田バレエ学校がロシア・サンクトペテルブルクのエルミターージュ劇場(2月25日)を皮



松岡伶子バレエ団
「カルミナ・ブラーナ」(7月29日)
撮影：むらはし和明



テアトル・ド・バレエカンパニー
「白鳥の湖」(11月19日)
撮影：岡村昌夫

切りに、愛知県みよし市、名古屋市と年内3回公演した創作バレエ「モットシャちょうとモリバーバのもり」は、「森が無くなると人間も世界も滅びる」という異色の環境テーマで共感の輪を広げた。

古典では、深川秀夫がテアトル・ド・バレエカンパニーに振り付け、演出した「白鳥の湖」(11月19日)が、「逆転の発想」から生まれた新バージョン。白鳥、黒鳥一人で踊り分けるだけの力量、表現力を持つプリマバレリーナの不在。最小限に絞った男性ダン

サー。決して層が厚いとはいえない女性陣の陣容。日本のほとんどのバレエ団が抱える弱点を逆手にとって、黒鳥オディールを悪魔ロットバルトの分身のように扱い、プロローグから終幕まですべてに登場させる。白鳥、黒鳥を二人に分ける積極的な意味があり、劇性を高めた。白鳥の群舞が終幕、悪魔を追い詰めるシーンは時代の女性パワーを映し、従来の枠を破った。

ダンスではジャズダンスの三代真史のソロ「ボレロ」が傑出。斉藤一郎指揮のセントラル愛知交響楽団の演奏で次第に高潮していくラベルのバレエ音楽に、愛知県芸術劇場大ホールに特設した能舞台で、織田信長の「静と動」を共振させて、独自の“三代ボレロ”を生み出した(1月8日)。

演劇 河野 光雄 (名古屋演劇ペンクラブ理事)

この1年、本稿の締め切りまでに地元劇団、企画集団の77作品を観た。芸達者の人たちによる新劇団の結成、新しい顔触れによる劇団の合同公演、次代の育成公演などが注目された。画期的だったのは総合劇集団俳優館の『新劇100年 珠玉の一幕集』と題する朗読・リーディングと上演による1月～2月の連続公演であった。

まず新劇団では、いろいろな舞台上で活躍する女優の西山諒を座長とするパンジャーボンバーズ(日本をひっくり返す爆撃手たち)で、旗揚げ公演『陽の訪れのように』(4

月)に続いて『花小金井ブルースエクスペディション』(12月)の2作品を上演した。前者は、幕末の志士と花魁を絡めた奇想天外なエンタテイメント、後者は、東日本大震災をはじめとする多様な困難に屈せず、希望を持ち乗り越えて行こうという人生応援劇であった。

合同公演は、印象に残った2公演を挙げておく。一つ目は若手劇団である「チェルシイとバニーガール」と「オレンヂスタ」の合同『ニコイチ』(10月)で、人間として存在していることの意味や苦悩を問い掛けた青春劇であった。前半を「オレンヂスタ」、後半

を「チェルシイとバニーガール」が担当するという趣向がユニークであった。もう一つは劇団更紗、天白浪漫劇場、演劇グループ凜の3劇団の合同『花も嵐も』（11月）で、こちらの主人公は結婚式場で働くアラフォー4人の結婚願望の強い女性、拳式者の秘話を描きながら自分たちも含めた男女の虚飾の皮をはいだ恋愛喜劇であった。



チェルシイとバニーガール×オレンヂスタ合同公演
『ニコイチ』

『新劇100年』は、総合劇集団俳優館代表森剣の企画・プロデュース力によるところが大きい。100年前は1911（明治44年）年、まさに坪内逍遙、島村抱月、小山内薫らが、演劇改革運動を起したころで、それに着眼した着想が非凡であった。取り上げられた劇作家は、岸田國士、久保田万太郎、木下杢太郎、真山青果、秋田雨雀、森本薫、山本有三、小山内薫、真船豊、田中千禾夫、菊池寛、中村吉蔵の12人、それぞれの作品を主に名古屋で



総合劇集団俳優館公演
『新劇100年』「玄朴と長英」
左（長英）児玉俊介、右（玄朴）工藤真

活躍している7人の演出家と60人の俳優で、朗読・リーディング、上演という形で舞台化された。日程は、1月20日から2月20日までの土曜、日曜を中心とした13ステージ、会場は総合劇集団俳優館のスタ

ジオ、愛知県芸術劇場小ホールであった。多様化する現代演劇の原点を見詰め直すとともに若い演出家や俳優には“新劇”を体験する機会となり意義のある企画であった。

次代育成公演では、小熊ヒデジが主宰する「名古屋演劇教室」が今年3回目を迎え『アイスクリームマン』（3月）を上演、また名古屋市文化振興事業団の「みんなのリーディング」が7回目を迎え『いろとりどりのラブレター』（12月）を上演、いずれも演劇文化の地域への貢献成果を評価したい。

洋楽 早川立大（音楽ジャーナリスト）

洋楽界も、ほかのジャンルと同様、東日本大震災・福島原子力発電所事故とその影響を抜きにしては語れない。外来演奏家・団体の来日中止等が続出し、当地では、春シーズンの風物詩「名古屋国際音楽祭」で全8公演中、目玉のオペラ2公演を含む4公演が取り止めになったのをはじめ、中止が相次いだ。それだけに、メトロポリタン歌劇場が予定通り、名古屋で引越し公演の幕を開けた（6月4日『ラ・ボエーム』、5日『ドン・カルロ』、愛知県芸術劇場大ホール）ことは沈みがちの日本全体を元気付けてくれた。

さて、ことし最大の話は「名古屋マーラー音楽祭」だろう。マーラー没後100年を記念して、音楽諸団体で運営委員会を結成、この地域のアマチュア・オーケストラが連帯して、愛知県芸術劇場コンサートホールを会場に、マーラーの全交響曲を月に1曲ずつ、順番に演奏するという、世界的にも稀有の壮大な試みだ（第8番『千人の交響曲』は2012年8月）。参加したのはオストメール・フィルハーモニー（1月と12月の2回）、デア・フェルネ・クラング（2月）、新名古屋交響楽団（3月）、名古屋ムジークフェライン管弦楽団（4月）、アンサンブル・エネルギー（5月）、長久手フィルハーモニー管弦楽団（6月）、名古屋市民管弦楽団（7月）、オルカ・フィルハーモニー管弦楽団（9月）、名古屋シュピールシンフォニー（10月）、伊勢管弦楽団（11月）の10団体。アマチュアとは思えない水準の高い熱演を披露し、毎回、盛況だった。中で、1、2、9、12月の4公演を指揮した名古屋市出身の有望株・角田綱亮の活躍が光る。

次に、セントラル愛知交響楽団の第116回定期演奏会。武満徹『系図』や高橋悠治『大阪1694年』などの現代作品を取り上げ、常任指揮者の齊藤一郎が鋭い感性を発



「名古屋マーラー音楽祭」角田綱亮と
オルカ・フィルハーモニー管弦楽団
（9月4日愛知県芸術劇場コンサートホール）



北村朋幹 ピアノ・リサイタル
（4月9日、宗次ホール）

揮した（11月4日、しらかわホール）。名古屋フィルハーモニー交響楽団は定期演奏会で押しなべて高い水準の演奏を維持し、チャイコフスキー・ツィクルス（市民会館名曲シリーズ）、シューベルト・ツィクルス（しらかわホールシリーズ）にも着手して意欲的だ。

歌劇では名古屋二期会がオッフェンバックの名作『天国と地獄』に挑んだ（10月1、2日、愛知県芸術劇場大ホール）。歌手、合唱、オーケストラ、演出、舞台装置と、関係各部

門が健闘したが、日本人がオペレッタを上演する根本的な難しさを改めて感じさせた。

独奏では、北村朋幹ピアノ・リサイタルを挙げる（4月9日、宗次ホール）。天国的な光に溢れているはずのシューベルトの『幻想ソナタ』を死の息吹で塗り込め、大震災が東京芸大在学中の俊英を震撼させたさまがまざまざと窺えた。

能楽 竹尾 邦太郎 (能楽評論家)

1月2日、名古屋能楽堂「新春謡初め」シテ方五流・狂言和泉流により厳粛のうちにも和やかに新年を寿ぐ。翌3日は『正月特別公演』恒例「翁」は武田邦弘・大志の親子共演。目出度く翁・千歳を勤める。

『宝生会』「春日龍神」内藤飛能。外国の文物を崇拜する排外思想に対する排外思想が主題。釈迦が在世ならばともかく、渡唐までもない、と明恵上人を諷める春日の宮守、龍神となって現われ、翻意を確め、説得せずには置かない気迫をみせる。

4月『青陽会』「老松」清沢一政。東風吹かば、の歌に感じ、流謫の菅原道真公の許へ都から飛来の紅梅、後を追う松。天神伝説を脚色する。現われる老松ノ神は天下泰平を寿ぎ、重々しく荘重に舞う。

5月『やるまい会』は14世野村又三郎が襲名を自祝し、亡き先代に捧げる感謝は喜び横溢の「三番叟」を潑刺と勤める。鈴之段では面箱持の嗣子・信朗(10歳)から神妙に鈴を受け取る辺り、微笑ましくも、家芸を継承する厳しさ垣間みる思い。

『第5回・西村同門会』「黒塚」長田驍。安達原に独り佗しく住む老女、実は鬼女の化身。宿を貸した山伏に糸を繰りながら来し方を述懐する老女、冷え冷えした寂寥感の漂う舞台に巧者の充実ぶりをみる。

7月『定例公演』「一角仙人・酔中之舞」梅田邦久・嘉宏。早天を憂慮する帝、一角仙人が幽閉した雨を司る龍神の解放に美女を派遣、酒色に溺れさせて一角仙人の通力を失わせようと画策。それが図に当たり、まんまと籠絡され、酔って舞う一角仙人が巧妙。歌舞伎「鳴神」の原典。

『御洒落名匠狂言会』「重喜」井上蒼大(7歳)。法事に備え師僧の剃髪を任されて小僧の重喜、「弟子七尺去って師の影を踏まず」の訓戒を守り、竿に剃刀を括り付けての遠隔操作の可笑しみもさりながら、師僧とのはきはきした応対の一所懸命が健気。

8月『衣斐正宜後援会会』「松風・見留」衣斐正宜。在



『名古屋能楽堂 定例公演』「一角仙人・酔中之舞」
左より一角仙人 シテ梅田邦久、旋陀夫人 ツレ梅田嘉宏
(撮影 能楽写真家協会会員 杉浦聖次)

原行平を思慕する汐汲女・松風、形見の烏帽子・狩衣、捨てても置かれず、と犇と抱き締める激情は、身に着ければ松を行平と幻視、狂おしく舞う心情切ない。

10月『久田観正会』「融・十三段之舞」久田勘鷗。融大臣の在りし日の栄華の遊舞、興に乗り、舞い捲る趣は颯爽として悠揚迫らず、大臣の器量の大きさ遺憾なくみせる。

『邦謡会』「姨捨」梅田邦久。能の最深奥・三老女の一、傘寿を自祝する披キ。棄老伝説を踏まえてはいるが、似て非。澄み切った姨捨山の月光の中、溶け込むかの様に舞う冷えたる美しさ。梅田邦久、芸の集大成。

11月『金春会』「葵上」鬼頭尚久。妬心ただならず、葵上に憑く六条御息所ノ生霊、葵上の枕頭、「思ひ知らずや、思ひ知れ」と激情に面鋭くキッと睨め付ける凄み、鮮烈だったが、中入に唐織引き被く際の不手際は少々残念。

朗報は笛方藤田流宗家藤田六郎兵衛氏の観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞。

邦舞 岡安 辰雄 (日本演劇協会評論部)

栄枯盛衰はこの世のならいで、この一年、名古屋の日舞界にも嬉しいこと、悲しいことがいくつかありました。関係者が切ない思いをしたのは西川流の古参、西川貞寿さんの旅立ち。これとは逆にプラス思考で次代への展望ができたのが工藤流の世代交代です。貞寿さんは岡崎市を本拠に後進の指導に当たってきた古武士のような舞踊家。対する工藤家の方は三代目の扇寿家元が宗家に、長男英記が代々の名跡倉鍵を継いで四代目家元となり、芸の伝承が親から子へという形で受け継がれました。その重責を負った四代目は、流派あげての工藤会で「奴道成寺」そして暮れの五流舞踊で「俄獅子」の幫間と「関の扉」の関兵衛とイロの違う役どころを受けもって大車輪。熱い思いで第一歩を舞台に刻み込みました。

そんなこんながあったこの一年。この地区の日舞を振り返ってみますと、流派あげての集団力で日舞公演のあり方を問いかけたのは西川流の「名古屋をどり」。これまで10日間だった公演を5日に半減。さらに地方の生演奏を録音にかえ、昼夜の番組も大胆にかえてこれまでにない試みをしてみせました。



名古屋をどり「風詩」のフィナーレ (9月7～11日、中日劇場)

ひょっとしてこれで終わりと危ぐした人もいたと聞きます。しかしすべてがマイナスに働いたわけではなく、昼夜の柱に据えた喜劇路線の「赤い陣羽織」と「鴉の殿様」の再演が共に好評。さらにフォークの神様、岡林信康の曲を使った実験作が思いのほか好評。楽日の公演では全員が総立ち。異様な盛り上がりを見せました。

(「邦舞」8ページに続く)

この人と...



尺八演奏家・東海三曲演奏家の会代表

いわ た せい えん

岩田 西園さん 上

古曲の伝承を受け継ぎ 現代邦楽の創造活動へ

岩田西園師は少年時代から尺八の本曲（独奏曲）と外曲（箏・三絃との合奏曲）を学ばれ、西園流尺八六代宗家として、東海三曲演奏家の会代表として演奏活動と後進の育成に多忙な日々を送られている。

今回の前半では、生い立ちから昭和40年代までの演奏活動と、名古屋の尺八・三曲の歩みを伺った。

（聞き手 飯塚恵理人）

生い立ちと尺八・三曲合奏の稽古

岩田西園師は西園流尺八の愛好者であった岩田祥園氏を父として昭和7年9月6日に誕生され、現住所でもある中村区上米野で育たれた。終戦を迎えた中川中学在学の間から、父の手ほどきにより、尺八を手にするようになり、自然と「自分も尺八を吹いて箏と合奏したい」と思うようになったといわれている。そのころ井野川勾当が岩田師の自宅に週3回出張稽古にいらしていたので、中学のころには三曲合奏の稽古をされていた。古曲の合奏稽古は、中学卒業のころには一通り修了していたとのこと。



中学3年生の頃（昭和22年）
箏 木村美智子 三絃 井野川幸次 尺八 岩田律彦

初舞台は昭和22年3月21日に中区上長者町の那古野神社齋館で行われた「西園流尺八 春季演奏会」（西園会主催 後援 正和会＝琴・三絃 佐藤正和社中）で、岩田律彦の名で「玉くしげ」を吹かれている。同じ頃、

CKの子どもの時間に「八千代獅子」を合奏し、放送されている。その当時は、子どもが尺八を上手に吹くということで珍しがられ、貴重に扱われた。長老の岡崎洲園氏が、「放送式題」として岩田師のために詠まれた和歌が残っている。「いみちくもわかき名手（ふきて）は放送にすくれしわさをあらわしにけり」。



「三谷」 左から岩田祥園、小林西園
（昭和30年頃 NHK CKホール）

高校生の頃から岩田律園と名のり、西園流の四世小林西園師と平野芳園師に習っている。

昭和24年からは、三品勾当宅に火曜日に合奏練習に伺い、また渡辺富美子師のお宅にも金曜日に合奏練習に行かれていた。この時代は停電も多く、合奏稽古中に停電になる



昭和30年頃 谷北無竹

ことも多かった。お二人とも目が不自由で、岩田師は暗譜して稽古に行かれていたので、停電の時間は三品勾当と渡辺先生による稽古を独占できたといわれている。



昭和 31 年頃
前列左より浦本浙潮 浦本夫人 岡崎夫人 岡崎洲園
後列左より石田普竹 岩田律園

また昭和 25 年から明暗対山流本曲を谷北無竹師に習い、それに続いて、当時山形にいらした浦本浙潮師についた。浦本師から習ったのは「布袋軒鈴慕」である。またその頃から宮城曲に取り組み、三品勾当夫人と合奏の稽古をされている。昭和 26 年に名古屋工業大学建築学科に進学し、すぐに尺八同好会を作られた。大学以降は、宮城派の田中睦子、小林嘉子各師に合奏指導を受けた。田中師よりは吉田晴風の吹き方などを教わる機会があり、大変貴重だった。上手な箏曲の先生に合奏指導してもら



名古屋大尺八同好会発表会(昭和 27 年 11 月)
左から三品咲子 栗田景園 岩田律園

うと、曲の表現の理解と箏・三絃とのアンサンブルとしての尺八の相性がよくなると岩田師は言われている。

昭和 20 年代後半から 30 年代の演奏活動

大学在学中の昭和 27 年頃、箏と尺八の流派を超えた若手の熱心家で、「若葉会」という合奏研究会を結成し、公開演奏会を 7 回行った。若葉会の主要メンバーとしては、岩田師の他に、丹下成峰(尺八・都山流)、沢井三山(尺八・都山流)、田中田鶴子(箏・国風会)、三輪令子(箏・国風会)、中野和枝(箏・国風会)、横江千代子(箏・国風会)、水谷久子(箏・国風会)、加藤泰子(箏・宮城会)各氏などが挙げられる。昭和 29 年 4 月 29 日に中村児童館で行われた第 1 回の若葉会のプログラムから主な賛助出演者を挙げると、「三絃、箏の部」で土居崎正富、三品正保、横井みつゑ、渡辺富美子、田中睦子、「尺八の部」で平塚晃山と野村成山の各師である。名古屋の一流の先生方の若手の俊英を集めた会で、演奏曲は古曲中心であったが、宮城曲が入るなど、古典から現代邦楽に進みかけた時代であり、その過渡的な性格を持った会であり、次世代の三曲界に大きな影響を与えた。

昭和 30 年代には宮城派の田村通子師に舞台や放送出演で指導を受けるなかで、当事の都山流若手名手であった沢井三山氏・森故山氏の二人と舞台をともにし、新曲

の演奏法に影響を受け、それを吸収した。このことによつて新しい尺八の方向が拓けていった。

昭和 40 年代の演奏活動—現代邦楽の時代

昭和 40 年になると、現代邦楽が盛んになり、「尺八三人の会」(沢井三山 森故山 岩田律園)で尺八を用いた現代曲を盛んに演奏し、また放送も行った。現代曲の



「若狭念仏による変奏曲」(昭和 45 年頃 NHK CK ホール)
前列左より森故山 沢井三山 岩田律園 佐竹正治

特徴としては、邦楽の専門家ではなく、洋楽の作曲家が尺八など邦楽器を用いた新しい音楽を作っていたことが挙げられる。名古屋放送局録音での現代邦楽地元演奏の例としては、NHKFM で昭和 44 年 9 月 20 日に放送された清瀬保治作曲の尺八三重奏曲(I 沢井三山 II 森故山 III 岩田律園)があげられる。これは東京で初演されたものだが、名古屋で初演されたものとしては同じメンバーで NHKFM による昭和 46 年 12 月 15 日放送の「尺八三重奏曲「三本の尺八のための音楽」(熊谷賢一作曲)」があげられる。熊谷賢一氏のような名古屋で初めての現代邦楽の作曲家が生まれたことは特筆すべきことである。また現代邦楽で、尺八と箏のアンサンブルの例としては、昭和 42 年 9 月に同じ NHKFM で放送された宮城派の田村通子社中、中山義雄指揮、杵屋正邦作曲の「郡上節による主題と変奏」(I 沢井三山 II 森故山 III 佐竹正治 IV 岩田律園)などが挙げられる。全国的に現代邦楽が盛んになるなかで、名古屋の演奏家により名古屋の放送局から全国に発信された意義は大きい。



「尺八三重奏曲」(昭和 46 年 NHK CK ホール)
左から森故山 沢井三山 岩田律園

(次号に続く)

2011 1 年をふりかえって

(「邦舞」5 ページより続き)

この公演を含めてこの地方で行われた日舞は1月の舞踊協会主催の初舞いから、12月豊田市で行われた各流派合同の「そらの会」まで30余り。名古屋市内のほか豊田、豊橋、豊川、津島、春日井などに出向いて9割以上を拝見。いま振り返って心に残っているのは年季の入ったベテラン勢です。年頭から順を追って拾いだしてみると鯉女会で「山姥」など5番に挑んだ西川満鶴、地唄「六条御息所」と「喜撰」をやり分けた西川好弥、豊田の能舞台で念願の「ゆき」を卒論のように舞ってみせた西川釉、ユーモア邦楽「あたま山」を洗い上げた内田るり久美、組踊で琉球舞踊の魅力を披れきした谷田嘉子と金城

美枝子、二代目鶴吉の追善で異色の「競鼓」で別な一面をみせた赤堀加鶴繪、傘寿を過ぎても老いを寄せつけない西川長寿、豊橋の地で芸魂を存分にみせた西川鯉廣、立役女形二様の西川茂太郎と西川菊次郎の二人は茂太郎が「お園」菊次郎が「お吉」で本領を發揮してみせました。

このほかでは流派を超えた交流がいくつかあり、稲垣友紀子と五條園美が若いころ世話になった山路曜生さんをしのぼうと自分の公演に山路作品を組み込んだ公演も。そして暮れの「そらの会」では霞花遊、西川条環、正弥、花柳素洲、鶴久らが「沙羅双樹」を創作、次へのひろがりを予感させる動きをみせました。

邦楽 北島 徹也 (中部日本放送)

名古屋長唄各師匠が顔を揃えた第36回「名古屋長唄大会」(2/13 芸術創造センター)に引き続き、杵屋見音代と杵屋見佳主宰の第6回「見音代会」(3/27 中電ホール)、杵屋勝桃主宰の第15回記念「勝桃会」(4/10 今池ガスホール)、稀音家六鈴友主宰、孫の住田長ゆきをはじめ一家出演の第60回記念「友音会」(4/24 今池ガス)、杵屋喜多六主宰の第47回「青陽会」(7/31 中電)、五代目杵屋三太郎七回忌追善と銘打った第18回「杵三会」(10/9 今池ガス)、第18回「杵屋六秋・六春おやこ会」(11/12 今池ガス)と春秋恒例の長唄各会が開催された。

国風音楽会は「生田祭 箏曲定期演奏会」(10/2 中電)で江戸期の吉沢検校をしのび、三曲合奏『深山木』に胡弓の沢田孝子と三味線で今井勉検校が出演した。その今井勉検校が伝える平曲『那須与一』を、野村萬斎が狂言『奈須与市語』と比較上演(『MANSAI 解体新書 その拾九「語り」〜語り物の系譜(リテラチュール オラル)〜』12/9 東京世田谷パブリックシアター)した。しかし、盲人演奏家間で伝えられた平曲の今後の伝承は今、危機的状況にある。

生田流箏曲の正絃社は「春の公演」(4/16、17 市民会館ブルニエホール)を催した。その正絃社初代家元の野村正峰は10月22日に逝去された。ご冥福をお祈りする。

名吟会の川地重幸が傘寿記念として鶴澤清治の出演を

得、素浄瑠璃『新口村』を語った「邦楽ノ会」(4/29 今池ガス)は芸どころ名古屋の長老の風格。

第22回名古屋市民芸術祭2011の主催事業として「和の管絃楽」(10/16 アートピアホール)が催され、

邦楽演奏家が集った。市民芸術祭の伝統芸能部門には、箏曲の「大久保智子リサイタル」(11/20 電気文化会館)、「磯村琴保 尺八リサイタル」(11/26 しらかわホール)、第19回「三曲演奏家コンサート 箏 尺八いまむかし」(11/27 電気文化会館)が参加した。

第65回「名古屋邦楽大会」(11/23 中電)で長唄の吉住小隆治(山田隆)、小唄の鶴飼加代峰がその永年の邦楽活動によって表彰された。



第65回名古屋邦楽大会
小唄「立山細」「双六や」鶴飼加代峰
(撮影/松本潤)

美術 日沖 隆 (美術批評)

中東の民主化の激動で幕を明けた2011年。3月にはあの空前絶後の東日本大震災。地震による津波と原発被害は「家族の死と絆」について痛切に問いかけた。美術界では海外作品の貸し出し停止や交流展の中止が起り、文化予算を復興資金に回すという自治体も出た。愛知トリエンナーレの次回開催は朗報だが、日頃の活動支援こそ知恵を絞ってほしい。

美術館の企画では、表現主義の源流に位置する「カンディンスキー青騎士展」(愛知県美)と「没後120年ゴッホ展」(名古屋市美)が人気を集めた。その後、フェルメール(豊田市美)、

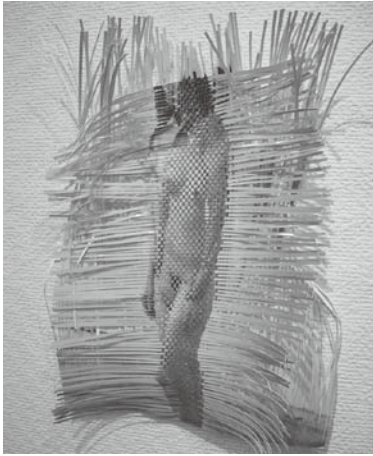
レンブラント(名古屋市美)というオランダ巨匠名画が古典ファンを楽しませたが、「ジム・ダイン」(ボストン美)、「生誕100年ジャクソン・ポロック展」(愛知県美)というアメリカ現代美術の革新性の紹介には拍手したい。また、「東松照明展」(名古屋市美)も写真マニアへの貴重な企画だった。

日本作家では、東北復興支援としての「棟方志功大板画展」や「島田章三展、平松礼二展、中村正義展」ら地元ゆかり作家の追跡が興味深く、小企画にも、市美の「米山和子展」と「ぷろたくしょん我'S展」、県美の「大西康明一堆积の裏

側展」などはキラリと光った。

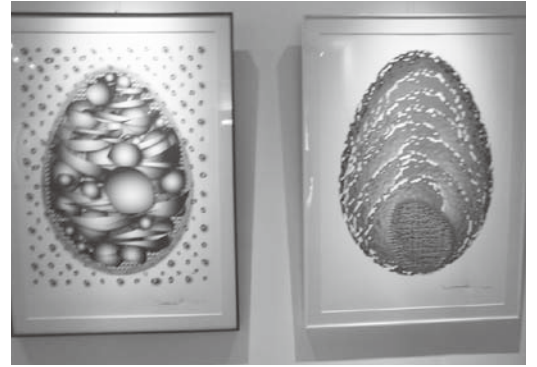
また、毎年優秀な若手アーティストに発表の場を与える県美の「アーツ・チャレンジ 2011」や民間の「第2回Dアートビエンナーレ」展は、情報の混沌の中から美術的統合を試みようとする意欲溢れる企画で、今後も注目すべきだ。

他方、ギャラリー企画では「O JUN展」と「岡崎乾二郎展」(ガレリア・フィ



櫻井裕子展(中京大学C・スクエア)

ナルテ)に感心。絵具や油薬の筆触と物質感を単純化して瞬間性を定着、豊かな空間を表現する妙技にうならされる。女性作家では、ケンジ・タキギャラリーの「手塚愛子展」がタペストリーから特定の糸だけを抜き出す手法で不在の像を浮上させ、中京大C・スクエアの「櫻井裕子展」も写真を細切りにして編み直すモザイク的裸婦像で、自我への不安と構築を交錯させて秀逸だった。また、栄の愛知県芸サテライトギャラリーでの「河村み」の映像&パフォーマンス、「今村哲・染谷亜里可・山元ゆり子+D.D. [二重に出歩くもの]」



加藤大博展(犬山市岩田洗心館)

の空間インスタレーションの労作、さらに一宮市織部亭「杉山健司」展の眼球のマイクロコスモス、犬山市岩田洗心館「加藤大博展」におけるタマゴの多彩な視覚性の獲得なども充実していた。そして市民ギャラリー矢田の「simple things」展。5人の作家が、スペクタクルな表現でなく、主体的に「みる」意味と質の再考を促し、出色だった。

今年、名古屋で久しぶりに開かれたウエスティンナゴヤキャッスルと松坂屋でのアート・フェアも特記しておきたい。不況に負けず、アートの商品性を高めようとするギャラリーの必死の努力には敬服する。アートも多様化する過程で、矮小化されていく状況にある。美術のネットワーク強化は一層求められている。

文学 清水良典(文芸評論家・愛知淑徳大学教授)

東日本大震災の以前と以後で、まったく別の国のように見える年だった。もとより文学は、家族を失い住処を追われた被災者に対して、何一つできはしない。その無力さを思い知りながら、しかしせめて何かできないかという思いを行動に移した若い作家たちがいた。名古屋市在住の吉川トリコが、新潮社主催の「R18文学賞」出身の同世代の作家仲間たちに呼びかけ、Web雑誌「文芸あねもね」を立ち上げた。購読料が被災地への支援金になったばかりでなく、その心意気で意欲的な作品が書き下ろされている。そして8月末には、名古屋市内で2日間にわたって記念トーク・イベントが開かれた。豊島ミホ、宮木あや子、南綾子という新鮮な顔ぶれが手弁当で集まり、デビュー前の逸話を楽しく語り合った。なお吉川は、これまでと一線を画す意欲作『少女病』を刊行している。

先立つ3月末にもネットで声を掛け合ったのがきっかけで、前述の吉川を始め太田忠司や辻真先ら作家や、編集者たちが30名以上集まって交流する「なごみゃあ会」なる会合が、名古屋市内で行なわれている。震災直後で開催が危ぶまれたが、このような稀有な機会を待ち望む声で実現したものだ。名古屋も、このような自発的な文学イベントを開催する場所になってきたことはうれしい。

他にも名古屋の諏訪哲史、吉原清隆をはじめ、近隣の広小路尚祈、墨谷渉など若手作家が、そろって文芸誌に作品を発表し、多産な一年だった。また山内令南が「癌だましい」で文学界新人賞を受賞した直後に病死したことは、まことに残念なできごとだったが、その凄絶な作品は全国の読者を驚倒させたはずだ。地元出身作家の



「文芸あねもね」トークイベントの様様。
左より宮木、南、吉川



「文芸あねもね」の表紙

研究、西尾典祐の『城山三郎伝』、別所興一他による『杉浦明平を読む』が刊行されたことも、今後それぞれの作家の決定的な資料となるべき立派な成果である。

名古屋市主催の短編小説公募「ショートストーリーなごや」も第5回の募集を迎え、いよいよ充実してきた。第4回大賞を受賞した「ハトビト」など、シュールなイメージの凝縮力の高い異色作である。小説だけでなく、映画監督の登竜門としても全国的に注目されている。

名古屋市民芸術祭2011 名古屋市民芸術祭賞

名古屋市民芸術祭は総合的な芸術の祭典として、毎年10月、11月に開催しています。このうち参加公演において、特に優秀な公演に対し名古屋市民芸術祭賞を、特に表彰に値する公演に名古屋市民芸術祭特別賞が贈られることになっています。今年度につきましては、3公演に名古屋市民芸術祭賞を、1公演に名古屋市民芸術祭特別賞を贈ることに決定いたしました。

名古屋市民芸術祭賞（3公演）

【音楽部門】

長屋弘子&森本ふみ子ジョイントリサイタル ～マルコ・ボエーミ氏を迎えて～

11月6日 三井住友海上 しらかわホール



作品の精神の機微を深く掘り下げた内面的な表現を中心に豊かに展開された。長屋、森本の個性に合わせた選曲が考え抜かれていた。ピアニスト、共演の男性歌手陣の好演も光る。解説、照明、字幕などの演出が工夫された分かりやすい舞台は、幅広い聴衆にアピールして会場があたたかい雰囲気にも包まれた。

【長屋弘子・プロフィール】

90年：愛知県立芸術大学大学院研究科修了
99年：第20回名古屋市民会館新進演奏家紹介オーディション優秀賞
現在、名古屋二期会会員、名古屋音楽学校講師

【森本ふみ子・プロフィール】

78年：国立音楽大学卒業
現在、名古屋二期会会員・常任理事、Cortef主宰

【演劇部門】

shelf volume12「構成・イプセン—Composition/Ibsen」

11月5日～7日 セツ寺共同スタジオ



撮影：アマノ雅景

イプセンの戯曲を通して、人間の道徳観、倫理観、心の奥の葛藤を描く秀作である。俳優の演技力が極めて高く、劇空間に緊張感をもたらす。演出力も高い。必要最小限のシンプルな舞台美術、照明、衣装、抑制の効いた俳優の演技のアンサンブルは秀逸である。イプセンの戯曲を現代に活かすため様々な工夫を凝らしており、古典戯曲が持つ普遍的なメッセージを古びることなく現代に鮮やかに蘇らせる。極めて高い演技力、演出力を備えた完成度の高い作品だ。

【プロフィール】

02年：shelf 設立
08年：「Little Eyolf—ちいさなエイヨルフー」（セツ寺共同スタジオ）
名古屋市民芸術祭2008<審査員特別賞>受賞

舞台VTR映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。



ビデオソフトの企画・制作

有限会社 エーワン・ビデオ・システム
TEL (052)896-2256 FAX (052)896-4100



ハードシステム部門
AV機器販売部門（家庭用）
映像企画・制作部門
放送関連部門
機器設備レンタル部門

映像メディアの未来を創る
生きた情報を発信

TVS 株式会社 東海ビデオシステム
名古屋市中区上筒井二丁目14-15 TEL<052>322-6541(代表) 6562(芸能部)



■ホール舞台音響設備 販売、設計、施工、保守



株式会社 エーアンドブイ
T 464-0846
名古屋市千種区城木町二丁目98
TEL 052 (761) 5400
FAX 052 (761) 0909

【舞踊部門】

2011年 テアトル・ド・バレエ カンパニー公演「白鳥の湖」(全幕)

11月19日 愛知県芸術劇場 大ホール



古典の名作にオリジナリティと工夫を持ち込んで幻想美を息づかせた振付家・深川秀夫の才気が光る舞台だった。白鳥オデットと黒鳥オディールをダンサー2人が踊り分けて人間の光と影、表裏一体性を象徴する構成や、白鳥の群舞が悪魔を追い詰める力強い終幕の演出は、現代性もあって感銘を受けた。人や金のハンディに逆転の発想で挑み、最大限の舞台効果を発揮した点も評価したい。

【プロフィール】

81年：塚本洋子バレエスタジオ設立
 89年、90年：「ローザンヌ国際バレエコンクール」プリ・ド・ローザンヌ
 スカラシップ賞2年連続受賞
 95年：ナゴヤ・テアトル・ド・バレエ設立
 04年：名称を「塚本洋子バレエ団」に改称
 04年：塚本洋子バレエ団公演深川秀夫版「 Coppélia 」(全幕)
 名古屋市民芸術祭2004〈市民芸術祭賞〉受賞
 09年：名称を「テアトル・ド・バレエ カンパニー」に改称

名古屋市民芸術祭特別賞（1公演）

【音楽部門】(入魂合唱表現賞)

「創立40周年 クール・ジョワイエ演奏会」～男声合唱による西村朗作品集～

10月16日 三井住友海上 しらかわホール



全曲西村朗の作品でプログラミングされた演奏会は、40周年を迎えたクール・ジョワイエの活動の集大成であり、合唱活動への想いの大きさが伝わる渾身の演奏であった。新作初演作品を含むこれらの作品は難易度が高いが、緊張感が途切れず熱い表現が一貫したことが高く評価される。

【プロフィール】

71年：クール・ジョワイエ 設立
 77年：第1回演奏会（中電ホール）
 85年～88年 97年：全日本合唱コンクール全国大会一般の部「金賞」受賞

市内のイベントを検索!

ナゴヤ・アート・ナビ

▶ <http://www.art758.jp>

「ナゴヤ・アート・ナビ」ウェブサイトでは市内の文化施設のさまざまな催し物をご紹介します。ぜひアクセスしてお出かけください!

ナゴヤアートナビ

検索

掲載情報もお待ちしています。
 ホームページからお申し込みください。

問い合わせ 名古屋市文化振興事業団
 TEL 052-249-9385

ワクワク・ドキドキ特典がいっぱい!

使う! 創る!
観る!名古屋市文化振興事業団
「友の会」会員大募集

エンジョイコース(年会費3,000円)

- ・事業団主催公演や提携事業のチケット割引!
- ・情報満載の「友の会だより」などを毎月お届け!
- ・提携ショップでのお買い物の優待割引!
- ・会員の皆さまが参加できるイベント開催!など

クリエイティブコース(年会費15,000円)

- 上記エンジョイコースに加え、次の特典も受けられます。
- ・会員主催の公演チラシを事業団施設に無料配布!など

詳しくは、事業団「友の会」事務局まで TEL 052-249-9385

「なごや文化情報」編集委員

飯塚恵理人(椋山女学園大学文化情報学部教授)
 小沢優子(名古屋音楽大学講師)
 倉知外子(オクダ モダンダンス クラスタ副代表)
 酒井晶代(愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授)
 田中由紀子(美術批評/ライター)
 はせひろいち(劇作家・演出家)

当事業団の募集する事業にお申し込みいただいた場合の個人情報は、当該事業に関する事務連絡及び、当事業団の文化事業に関する案内のみに使用させていただきます。

「ショートストーリーなごや」第5回コンテスト事業 受賞作決定

名古屋のまだあまり知られていない魅力を発信するため、名古屋を舞台にした創作短編小説を募集するコンテスト事業「ショートストーリーなごや」。今年度で5回目を迎え、応募作はこれまでで最高となる374編にのぼりました。この度、委員長である清水義範氏(作家)をはじめとする最終選考委員によって、大賞1編・佳作2編を選考しました。

大賞「過去を描いた伊藤さんの話」

(野々村 務・作)

佳作「キスナナ the Final」

(きしのみよし・作)

「矢田川のバッハ」

(伊藤 由美子・作)



野々村 務



きしのみよし



伊藤 由美子

今後、受賞作品をまとめた作品集を制作し、市内各所で配布する予定です。

「ショートストーリーなごや」ウェブサイト([http:// www.s-story.org/](http://www.s-story.org/))にも受賞作品を掲載しております。

問い合わせ 公益財団法人 名古屋市文化振興事業団 TEL 052-249-9387 FAX 052-249-9386

第7回 尾張名古屋バンド決戦!

多数の応募の中から選考された、地元の青少年アマチュアバンド10組がナンバーワン!を目指して演奏します。(優勝賞金30万円、準優勝賞金10万円)

日時 3月4日(日) 13:00~18:00

会場 青少年文化センター アートピアホール

料金 500円<全自由席>

主催 名古屋市文化振興事業団、名古屋市、東海テレビ放送、東海ラジオ放送、FM AICHI、ZIP-FM

協力 エレクトリックレディランド、ハートランドスタジオ、ヤマハLM中日本、音楽情報サイトえびてん!、CRYSTAL GEYSER

問い合わせ 公益財団法人 名古屋市文化振興事業団 TEL052-249-9387 FAX052-249-9386



第6回優勝バンド SONIC BOOM 撮影:安田典謙

名古屋市文化基金のご案内 名古屋の文化を創るのは、あなたです。

名古屋市文化基金(名古屋市市民文化振興事業積立基金)は、市民生活に潤いをもたらす名古屋の文化の発展のために、昭和57年に設置されました。この基金は、皆様からのご寄附と市の出資金を積み立て、その運用による果実(利息)で、市民の文化振興のための事業を実施することに役立てられています。

皆様からのご寄附をお待ちするとともに、今後ともご支援、ご協力をお願い申し上げます。

参加体験事業

市民の皆様が参加・体験できる事業を積極的に展開しています。

鑑賞事業

伝統芸能をはじめ、優れた舞台芸術を紹介しています。

支援育成事業

市民の皆様が行う創造的な文化活動を支援しています。

情報発信事業

「なごや文化情報」などを発行し、文化情報を広く提供しています。



名古屋市文化基金は、ふるさと寄附金(納税)制度の適用対象となります。

※名古屋市民の皆様が、名古屋市文化基金に寄附される場合も、この制度によって税額控除を受けることができます。税控除等の詳細につきましては、リーフレット又は市公式ウェブサイトをご覧ください。

問い合わせ

名古屋市市民経済局文化振興室 TEL 052-972-3172
公益財団法人 名古屋市文化振興事業団 TEL 052-249-9390

詳しくは、市公式ウェブサイト トップページ

文化 基金

検索



感動を育てる種をまこう。
名古屋市文化基金